真福寺本・醍醐寺本『遊仙窟』におけるテのヲコト点について

――助字「之・而・也」の訓に着目して――

越智裕二

一、はじめに

訓点資料には、返点を兼ねると言われるテのヲコト点が存する（後掲の図3参照）。筆者はこれまで、その返点を兼ねるとされるテのヲコト点が、返点としてではなく、句切りを示す点として用いられていると見るべき資料が存することを述べてきた（拙稿（一九九八）（二〇〇七）（二〇〇八））。

例えば、『神田本白氏文集』（一一一三年加点）（以下、『白氏』と略す）においては、小稿で取り上げる『遊仙窟』と同様に、漢字左下の壺に施される星点[1]が「テのヲコト点」、漢字左下の壺から離れた位置に施される星点が「返点を兼ねるテのヲコト点」とされるのであるが（図3）、実際にそれらのテのヲコト点を調査してみると、左の用例〔1〕のように返読のある場合だけでなく、用例〔2〕のように返読のない場合にも、テのヲコト点は、漢字左下の離れた位置に施されているのである（用例は、太田次男・小林芳規両氏（一九八二）によった）。

〔1〕観舞聽歌知樂意（三／四五）

〈訓読文〉舞を観、歌を聽（キ）て、樂（音、角（音））の意を知ヌ。

〔2〕雲陰月黑風沙惡（三／三五六）

〈訓読文〉雲陰リ、月黑ク（シ）て、風・沙、惡シ。

もしこの壺から離れた位置に施されたテのヲコト点が返点であるならば、このように返読のない箇所にも用いられているのは不審である（筆者の調査によると、『白氏』において、ヲコト点を漢字の壺に施すか漢字の壺から離れた位置に施すかということは、かなり正確に書き分けられている）。筆者は、この加点状況から、この『白氏』において見られる返点を兼ねるとされるテのヲコト点は、そのように返点と見るのではなく、左の図1のように、句点・読点とともに三種類の句切れ方の違いを示すために用いられたものと見るべきではないかと考えている。つまり、言うなれば、句切りの点を兼ねたテのヲコト点ということである。

〈図1〉

・句点……終止形などの句切りを示す。
・読点……連用形中止などの句切りを示す。
・テのヲコト点…助詞テがつく中止などの句切りを示す。

このように見る時、これら句点・読点・テのヲコト点が、日本

語において多く見られるであろう三種類の句切れ方―終止形の句切り・連用形中止の句切り・助詞テがつく句切り―を示すのに都合のよい形になっていることは注目すべきではないだろうか（拙稿（一九九八）（二〇〇八））。

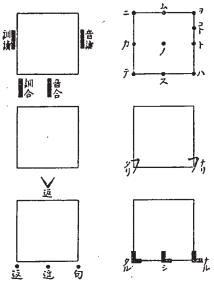
小稿もまた、このテのヲコト点を取り上げるものである。小稿では、博士家点とされる真福寺本『遊仙窟』（以下、「真福寺本」と略す）と醍醐寺本『遊仙窟』（以下、「醍醐寺本」）とを資料として取り上げ、これらの資料において助字「之・而・也」がどのように訓まれているのか、そして、それらの助字にそのテのヲコト点がどのように施されているのかを比較検討することによって、これらの資料を見る際にも、やはり、テのヲコト点を句切りの点とする視点が必要なのではないかということを述べたいと思う。なお、調査は、貴重古典籍刊行会（一九五四）（真福寺本）と築島裕・杉谷正敏・丹治芳男三氏（一九九五）（醍醐寺本）の本文を用いて行なった。

二、資料について

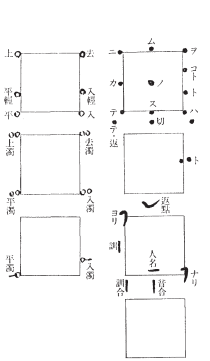
小稿で取り上げる真福寺本『遊仙窟』は、奥書には、文和二年（一三五三年）の書写とある。所用ヲコト点図は、平井秀文氏（一九三八）によると、左の図2のように帰納されるということである。ただし、このヲコト点図で平井氏は、漢字左下の壺から離れた位置に施された星点を単に返点とされているが、これについては、小林芳規氏（一九七四）が「星点の返点は仏書には基調をなすものとして盛用されるが、漢籍では「て」と兼用のヲコト点として用いるものであって、返点だけには使われない」とされており、単なる返点とするのではなく、左の図3（「醍醐寺本」のヲコト点図）のように、テのヲコト点も兼ねるものと見た方がよいようである。この返点を兼ねるテのヲコト点については、筆者がこれを句切りの点とテのヲコト点とを兼ねたものである可能性を考えていること、右にも述べた。

醍醐寺本『遊仙窟』は、奥書には、康永三年（一三四四年）の書写（原本、正安二年（一三〇〇年）書写）とある。所用ヲコト点図は、築島裕・杉谷正敏・丹治芳男三氏（一九九五）によると、左の図3のように帰納されるということである。

〈図2〉真福寺本



〈図3〉醍醐寺本



なお、小稿においては、右の図2・図3に見られるような漢字左下の壺に施されるテのヲコト点「テ」と漢字左下の壺から離れた位置に施されるテのヲコト点「テ・返」とを区別して、便宜上、その加点位置から前者を「壺のテ」、後者を「離れたテ」と呼ぶことにした。また、訓読文を挙げる際には、筆者の離れたテを句切りの点とする見方に従い、後者の離れたテを、ゴシック体の「て、」（テのヲコト点「て」と句切りの点「、」とを合わせた形）で示すことにした。

三、真福寺本・醍醐寺本『遊仙窟』における助字「之・而・也」の用例および調査結果

まず、「真福寺本」「醍醐寺本」より、その用例を挙げる。なお、之字については、「陳述」を示す場合（コレと訓読されるような場合）と、「連体修飾」の場合（ノと訓読されるような場合）とを分けて用例を挙げた。

〈真福寺本〉

【之】（全八八例）

◎陳述（全一二例）

〔3〕絳-樹青-琴・對之羞-死・（三ウ五）

〈訓読文〉絳（去）-樹（去）青（平軽）-琴（平軽）ト云（ヒ）シ女イロコノミモ、之に對ハマシかは羞チ-死ナマシ。

〔4〕遂射-之三發皆遶-遮齊・（三九オ二）

〈訓読文〉遂に射-之て三（タ）ヒ發（チ）て皆遶リ-遮ルこと齊シ。

〔5〕下官・又遣曲琴・取楊州青銅鏡・留之与十娘・（四七ウ六）

〈訓読文〉下官、又曲琴を遣ハシて、楊州の青銅の鏡を取（リ）て、留メテ十娘に与（フ）。

〔6〕余・遂止之・曰・（一〇オ三）

〈訓読文〉余、遂ニ止メ〔之〕て、曰ク、

〔7〕弱體・軽身・談之・不能備盡・（三ウ六）

〈訓読文〉弱キ-體、軽キ身、談ルトモ〔之〕、備に盡（クス）こと能（ハ）不。

◎連体修飾（全七四例）

〔8〕歎-鄉-関之眇邈・（一オ六）

〈訓読文〉鄉-関の〔之〕眇邈トハルカナルコトヲ歎ク。

〔9〕此是・崔-女-郎之舍耳・（三オ四）

〈訓読文〉此は是、崔（平軽）-女-郎と（イヒ）シヒトノ〔之〕舍ナラ（ク）耳。

〔10〕清-河-公之舊族也・（三オ六）

〈訓読文〉清-河-公には〔ノ〕〔之〕舊キ族なり〔也〕。

〔11〕近聽琴聲・似對文君之面・（五ウ三）

〈訓読文〉近ク琴の聲を聽キて、文君か〔之〕面に對ヘルニ似たり。

〔12〕得黄-石之靈術・控白水之餘-波・（一一ウ二）

〈訓読文〉黄-石カ〔之〕靈術を得白水（ノ）〔之〕餘-波を控ク。

〔13〕房-陵朱仲之李・（二七オ四）

〈訓読文〉房-陵の朱仲の〔カ〕〔之〕李、

〔14〕深-谷帯レ地。鑿穿崖-岸之形‖（一ウ二）

〈訓読文〉深谷地を帯(リ)て、鑿テ崖(平聲)-岸(去)(ノ)〔之〕形を穿テリ

〔15〕須-臾之間忽聞内-裏調レ筝之聲。（四オ一）

〈訓読文〉須-臾〔須-臾〕ノ〔之〕間に忽(チ)に内-裏に筝ノコトを調フル〔之〕聲を聞ク

〔16〕今日之後不敢差-違。（一二ウ五）

〈訓読文〉今日ヨリ〔之〕後は敢(ヘテ)差ヒ-違ハ不。

【而】（全三〇例）

〔17〕豈可同レ年而語共レ代而論哉。（一九ウ四）

〈訓読文〉豈年ヲ同(シク)シ〔而〕て、語ラヒ、代ヲ共に(シテ)〔而〕論フ可ケンヤ〔哉〕。

〔18〕十娘讀レ詩。悚-息而起。（八ウ四）

〈訓読文〉十娘、詩を讀(ミ)て、悚-息とヲノ、イ〔而〕て、起ツ。

〔19〕衆-人皆樹掌而咲。（三八オ四）

〈訓読文〉衆(モロヒト)-人、皆掌を樹テ〔而〕（て、）咲(フ)なり。

【也】（全一五例）

〔20〕河所レ經也‖。（一オ四）

〈訓読文〉河の經ル［左、經ル］所なり〔也〕。

〔21〕此是文章窟也‖。（一〇ウ三）

〈訓読文〉此は是文章ノ窟なり〔也〕。

〔22〕見武-功又復子-南夫也‖。（三八ウ一）

〈訓読文〉武-功ヲ見(ル)ニ又復、子-南カコトキノ夫ナリ〔也〕。

〔23〕此誰家-舎也‖。（三オ三）

〈訓読文〉此は誰か家舎ソ［家-舎ノイヘトカスル］〔也〕。

〈醍醐寺本〉

【之】（全八八例）

◎陳述（全一〇例）

〔24〕下官命弓-箭射レ之‖（四三五）

〈訓読文〉下官、弓-箭を命ムテ之に射ル

〔25〕談レ之不レ能レ盡‖（二五二）

〈訓読文〉之を談ルモノ盡(クス)こと能(ハ)不

〔26〕遂射レ之。三發皆遶-遮齊。（四四二）

〈訓読文〉遂(調)(二)之を射て、三(タ)ヒ發(チ)て皆、遶リ-遮ルこと齊シ。

〔27〕余・遂止之曰・（一一〇）

〈訓読文〉余、遂に止メテ〔之〕曰ク、

◎連体修飾（全七六例）

〔28〕出-入是-非之境（一三二）

〈訓読文〉是・非之境に出・入ス

〔29〕實天-上之靈-奇（九）

〈訓読文〉實に天ノ-上ノ〔之〕〔之〕霊・奇とアヤシクメツラシキ［アヤシクアヤシキ］

〔30〕山-濤之妻鑿壁・知阮-藉之賢人（二一〇）

〈訓読文〉山・濤之妻(調)は壁を鑿(チ)テ［て、］阮(平濁)・藉(入)之賢人ナルことを知ル

〔31〕兄即・清-河崔-公之弟-五息・（一二二）

〈訓読文〉兄は即(チ)、清・河の崔・公之〔之〕弟・五の息ナリ。

〔32〕片時・須-臾之間五嫂・則・至（一六二）

〈訓読文〉片時(二)、須-臾の〔之〕間に五嫂、〔則〕、至(リ)ヌ［至ル］

【而】（全三三例）

〔33〕下-官・逡-巡而・謝曰・（一四三）

〈訓読文〉下(上)・官(平)、逡(平軽)・巡(平)とノカレ而〔〔而〕て、〕謝(上)シテ［て］曰(ク)、

〔34〕桂-心咥-々-然低頭・而咲・（三六九）

〈訓読文〉桂・心咥・々・然トヲカシテ［とホヲエムテ］頭を低レて、〔而〕咲フ、

〔35〕下官・翕-然・而起謝曰・（四〇一）

〈訓読文〉下官、翕(入軽)・然(平濁)トシ［と(シ)］て〔而〕起(チ)て謝(シ)て曰(ク)、

〔36〕不知從何・而至（一六）

〈訓読文〉何從リシテ［て、］〔而〕至ルト云(フ)ことを知(ラ)不

〔37〕十娘・讀詩悚-息而起・（九四）

〈訓読文〉十娘、詩を讀(ミ)悚・息とシテ［左、ヲノヽイテ］〔而〕起ツ

〔38〕下官・拭淚而・言曰・（五一三）

〈訓読文〉下官、涙を拭(ヒ)〔而〕て、言(ヒ)テ［て］、曰(ク)、

〔39〕下-官・遷-延而・退曰・（一五九）

〈訓読文〉下-官、遷-延とタチヤスラヒ〔而〕て、退(シリヅ)(キテ)曰(ク)、

〔40〕掩ゝ口・而‖咲・曰・（一八六）

〈訓読文〉口を掩(ヒ)て、〔而〕〔〔而〕て、〕咲(ヒ)て曰(ク)、

〔41〕遂(ツ)作(タテ)而‖儛(ヒ)謝(シ)曰・（三六六）

〈訓読文〉遂(ツヒ)に作(タ)テ〔而〕〔て、〕儛(ヒ)て謝シて曰(ク)、

〔42〕僕・斂(メ)ゝ容(カタチ)而(シテ)‖答(カタチ)・曰・（一二五）

〈訓読文〉僕、容(カタチ)を斂メ而(ウ)シテ〔て〕答(ヘ)テ、曰(ク)、

〔43〕衆人・皆・折(ウテ)ゝ掌(ヲ)而‖咲(フ)・（四三四）

〈訓読文〉衆人、皆、掌を折(リ)テ〔折(ウ)テ〕〔而〕〔て、〕咲フ。

【也】（全一四例）

〔44〕此(レハ)・是(レ)・神-仙窟(イハヤ)也‖・（一四）

〈訓読文〉此(コレ)ハ〔は〕-是(コレ)、神-仙の窟(イハヤ)〔左、窟(スミカ)〕なり〔也〕。

これらの用例を見てみると、例えば連体修飾の之字について、用例〔28〕のように之字自体にノのヲコト点を施しその之字自体をノと訓む訓み方がある一方で、用例〔8〕〔32〕のように之字の上の漢字にノのヲコト点を施し之字自体は不読とする訓み方もあることが知られる。以下には、そのように助字を不読としているか否かという点に着目し、「真福寺本」と「醍醐寺本」とにおける助字の訓まれ方を比較検討することによって、それらに関わって施されたテのヲコト点をどのように解釈すべきかということを考察したいと思う。

左に挙げた表1は、そのように助字を不読としているか否かということを判断するのに有用であろう訓点に着目しつつ、用例を整理したものである。

なお、表1において、□△▽は漢字を示している。△▽は、返読の有無が関わる場合にそれを書き分けたもので、前者が返読のある場合、後者が返読のない場合である（用例番号を挙げてあるので用例と比較されたい）。「テ・ノ・カ・ナリ」は仮名点を示しているが、例えば資料に「ノ」の仮名点だけが施されている場合には「ノ」と示し、「ヒトノ」のように何らかのことばに「ノ」が続けられている場合には「□ノ」のように示した。ただし、資料に「シテ」の仮名点のみが施されている場合には、これも「テ」に含め、同様に「テ」で示した。

〈表1〉調査結果

〈真福寺本〉

【之】（全八八例）

◎陳述（全一二例）

□之　一例（用例〔3〕）　□-之　一例（〔4〕）

□(テ)之　一例（〔5〕）　□之　一例（〔6〕）

無訓　八例（〔7〕）

◎連体修飾（全七四例）

◇ノ・カという形で訓読されていると見られる例（全六四例）

⊙之　七例（〔8〕）　□ノ之　五例（〔9〕）

□之　二例（〔10〕）　□之　一八例（〔11〕）

□カ之　二例（〔12〕）　⊙カ之　一例（〔13〕）

無訓　二九例（〔14〕）

◇ノ・カ以外の形で訓読されていると見られる例（全一〇例）

活用語連体形　五例（〔15〕）

その他　五例（〔16〕）

◎その他（全二例）

如之何　二例

【而】（全三〇例）

◇〜テとなる形で訓読されていると見られる例（全二八例）

△テ△而　一例（〔19〕）　△△而　七例（〔17〕）

▽▽而　九例（〔18〕）　△テ△而　一例　無訓　一〇例

◇〜テ以外の形で訓読されていると見られる例（全二例）

而已　一例　その他　一例

【也】（全一五例）

◇ナリという形で訓読されていると見られる例（全七例）

△△也　一例（〔20〕）　▽▽也　三例（〔21〕）

▽ナリ▽也　三例（〔22〕）

◇ナリ以外の形で訓読されていると見られる例（全七例）

ナリ以外の形で文が終止している　五例（〔23〕）　マタ？　二例

◇ナリという形で訓読されているのか明らかでない例（全一例）

訓み方が明らかでない　一例

〈醍醐寺本〉

【之】（全八八例）

◎陳述（全一〇例）

□之　二例（〔24〕）　□之　五例（〔25〕）

□之　一例（〔26〕）　□之　一例　□テ之　一例（〔27〕）

◎連体修飾（全七六例）

◇ノ・カという形で訓読されていると見られる例（全六七例）

□之　二四例（〔28〕）　□ノ之　二例（〔29〕）　□ノ之　一例

□之　一〇例（〔30〕）　□カ之　七例（〔31〕）　⊙之　九例（〔32〕）

□之（ノ）　一例　　□之（ノ）　一例　　□之（ノ）　一例

□之（ノ）　一例　　□之（ノ）　一例　　□之　二例

□之（カ）　一例　　無訓　六例

◇ノ・カ以外の形で訓読されていると見られる例（全九例）

活用語連体形　七例　　その他　二例

◎その他（全二例）

如之何　二例

【而】（全三三例）

◇～テとなる形で訓読されていると見られる例（全二九例）

▽▽而（テ）　一例（〔33〕）　　△△而　二例（〔34〕）

▽▽而　二例（〔35〕）　　△△（テ）而　二例（〔36〕）

▽▽（テ）而　一例（〔37〕）　　△△而　一一例（〔38〕）

▽▽而　三例（〔39〕）　　△△而　一例（〔40〕）

▽▽（テ）而　二例（〔41〕）　　△△（テ）而　一例

▽▽而　一例　　▽▽（テ）而　一例

（テ）△△而　一例（〔43〕）

◇～テ以外の形で訓読されていると見られる例（全四例）

シカウシテ　二例　　而已　一例　　その他　一例

【也】（全一四例）

◇ナリという形で訓読されていると見られる例（全四例）

▽▽也　三例（〔44〕）　　▽▽（ナリ）也　一例

◇ナリ以外の形で訓読されていると見られる例（全六例）

ナリ以外の形で文が終止している　四例　　マタ　二例

◇ナリという形で訓読されているのか明らかでない例（全四例）

無訓　三例　　訓み方が明らかでない　一例

以下には、この調査結果をもとに、「之・而・也」それぞれについて検討を行ないたい。ただし、傾向のはっきりした也字を最初に取り上げ、その後、之字、而字の順に検討を行う。

四、也字の訓まれ方について

也字は、多く終止する箇所に用いられており、小稿で問題とする離れたテと直接関わるような用例は見られないようではあるが、この『遊仙窟』における助字の訓まれ方の一例として、ここではその用例を取り上げ検討を行ないたいと思う。

也字は、先の表1に示したように、『遊仙窟』においては、「醍醐寺本」でマタと訓読された例（二三七、二三七）（「真福寺本」では無訓（二一オ四、二一オ五））を除き、全て文末に用いられている。ただし、必ずしも

ナリという形では訓まれず、活用語の終止形などのようにナリがつかない形で訓読された例も見られる（用例〔23〕）。

小稿では、右に述べたように助字が不読とされているか否かということを見ていくので、まず問題となるのは、用例〔20〕〔21〕のように、也字のところでナリという形で訓読された例である。

そこで、まず左に表2として、先に挙げた表1から、也字のところでナリという形に訓読されていると見られるものを抜き出して挙げた。その際、その訓点の加点状況から、也字自体をナリと訓んでいると見られるものと、也字自体を不読としていると見られるものとを分けて挙げた。

〈表2〉

〈真福寺本〉

【也】（全一五例）

◇也字をナリと訓んでいると見られる例（全〇例）

なし

◇也字をナリと訓まず不読としていると見られる例（全七例）

△△也　一例　　▽▽也　三例　　▽□（ナリ）▽也　三例

◇也字をナリと訓んでいるのか不読としているのか明らかでない例（全一例）

訓み方が明らかでない　一例

〈醍醐寺本〉

【也】（全一四例）

◇也字をナリと訓んでいると見られる例（全〇例）

なし

◇也字をナリと訓まず不読としていると見られる例（全四例）

▽▽也　三例　　▽□（ナリ）▽也　一例

◇也字をナリと訓んでいるのか不読としているのか明らかでない例（全四例）

無訓　三例　　訓み方が明らかでない　一例

也字については、「真福寺本」「醍醐寺本」ともに、ナリを表す訓点（ナリのヲコト点、ナリの仮名点）が全て也字の上の漢字に施されており、也字自体にそのような訓点が施された例は見られない。このことから、也字については、「真福寺本」「醍醐寺本」ともに、これを不読としていると見てよいようである。

也字のところでナリという形に訓まれていない例についても、也字が文末に用いられている場合には、その也字自体に訓点が施された例は見られず、也字を不読と見ることと矛盾しない（用例〔23〕）。ただ、也字が文中にある場合に、「醍醐寺本」ではこれをマタと訓じた例が二例見られた（前述）。真福寺本ではこれらに訓は施されておらず、どのように訓むべきか明らかでない。これらの例は、確かに訓読された例ではあるが、文末の例とは別に扱うべきであろう。

五、之字の訓まれ方について

『遊仙窟』において、之字は、先の表1に示したように「陳述」の例と「連体修飾」の例がほとんどで、その他には、「如之何」の形でイカン（「真福寺本」二一ォ一）、イカンソ（「醍醐寺本」二三四、二三五）と訓まれた例が見られるのみである。連体修飾の例は、ノ・カと訓まれていると見られるものがほとんどであるが、修飾句が活用語である場合など、ノ・カと訓まれない場合もある。修飾句が活用語の場合には、「～スルノ～」というように修飾句と被修飾句との間にノをはさんだりはせず、連体形でそのまま下にかかっているようである（用例〔15〕）。用例〔16〕のように、意訳的な形に訓読され、之字が訓まれない場合もある。

之字が不読とされているか否かを見るには、まず、この之字をコレと訓むことのできる形（陳述）になっている例と、ノやカと訓むことのできる形（連体修飾）になっている例とを見る必要があろう。そこで、先に挙げた表1から、コレという訓や、ノ・カという訓に関わると見られるものを抜き出して整理し、左に表3として挙げた。

〈表3〉

〈真福寺本〉

【之】（全八八例）

◎陳述（全一二例）

◇之字をコレと訓んでいると見られる例（全一例）

□之　一例

◇之字をコレと訓まず不読としていると見られる例（全一例）

□[1]之　一例[2]

◇之字をコレと訓んでいるのか不読としているのか明らかでない例（全一〇例）

□之（テ）　一例　　□之　一例[3]　　無訓　八例

◎連体修飾（全七四例）

◇之字をノ・カと訓んでいると見られる例（全〇例）

なし

◇之字をノ・カと訓まず不読としていると見られる例（全三五例）

⊙之　七例　　□之（ノ）　五例　　□之（ノ）　二例　　□之　一八例

□之（カ）　二例　　⊙之（カ）　一例

◇之字をノ・カと訓んでいるのか不読としているのか明らかでない例（全二九例）

無訓　二九例

〈醍醐寺本〉

【之】（全八八例）

◎陳述（一〇例）

◇之字をコレと訓んでいると見られる例（全九例）

□之　二例　　□之　五例　　□之　一例　　□之　一例

◇之字をコレと訓まず不読としていると見られる例（全〇例）

なし

◇之字をコレと訓んでいるのか不読としているのか明らかでない例（全一例）

□之（テ）　一例

◎連体修飾（全七六例）

◇之字をノ・カと訓んでいると見られる例（全四四例）

□之　二四例　□之（ノ）　二例　□之（ノ）　一例　□之　一〇例

□之（カ）　七例

◇之字をノ・カと訓まず不読としていると見られる例（全一七例）

⊙之　九例　□之（ノ）　一例　□之（ノ）　一例　⊙之（ノ）　一例

□⊙之（ノ）　一例　□⊙之（ノ）　一例　□之　二例　□之（カ）　一例

◇之字をノ・カと訓んでいるのか不読としているのか明らかでない（全六例）

無訓　六例

之字の訓み方については、「真福寺本」と「醍醐寺本」との相違が顕著である。

まず、連体修飾の例については、「真福寺本」では之字自体をノ・カと訓んだ例は見られず、訓が施された例の全てが之字を不読としているのに対し、「醍醐寺本」では之字を不読とする例も見られるものの、明らかに之字自体をノ・カと訓んだ例が認められる（用例〔28〕〔30〕〔31〕）。

陳述の例についても、「真福寺本」においては、用例〔3〕〔4〕の二例を除き、他の全ての例が之字に対して無訓であるのに対し、「醍醐寺本」においては、用例〔27〕の一例を除き、全ての例において之字をコレと訓読したことを示す訓点（ニ・ヲのヲコト点、雁点（レ点））が施されている。

「真福寺本」の陳述の例については、無訓であるため、厳密には、コレと訓んでいながらそれを訓点によって示していないのか、或いは、之字が不読であるために訓点を施していないのか断言することはできない。しかし、之字の連体修飾の例について、「真福寺本:不読」「醍醐寺本:訓んだ例あり」と見られることから推察するに、陳述の例についても、基本的には、やはり同様に「真福寺本:不読」「醍醐寺本:訓んだ例あり」という関係にあると見た方がよいのではないかと思う。その方が之字の訓まれ方として一貫性があろう。

右のノ・カ、コレ以外の之字の例（前述）については、「如之何」の例を除いて、「真福寺本」においても「醍醐寺本」においても之字自体に訓点が施された例は見られず不読とされていると見てよいようである。「如之何」の例については、「真福寺本」「醍醐寺本」にそれぞれ「イカン」「イカンソ」と訓まれた例が見られるが、これは別に扱ってよいであろう。

ここで注目したいのが、「真福寺本」の之字の陳述の例に見られ

る□之の一例である。

右の表3では、この例をコレと訓んでいるのか不読であるのか明らかでない例として分類したが、これは筆者の離れたテを句切りの点とする見方によるもので、実際には、離れたテを返読を示すものと見るか句切りを示すものと見るかで、その分類は異なってくるのである。以下には、この例について考察したい。

まず、離れたテを返読を示すものとする見方によって、この□之の例を検討してみたいと思う。思うに、離れたテを返読を示すものとする見方に従うと、その訓み方として、左の二種類の訓み方のうち、どちらかを選択することになるのではないだろうか。

1□之の左下の星点を離れたテ（返読を示すもの）と見て、之字から返読する形で訓読する。つまり之字をコレと訓む。

2□之の左下の星点を壺のテと見る。つまり之字自体をテと訓読する。

これらを比較するに、2の訓み方はこの『遊仙窟』においても他に見られない訓まれ方であるから、この□之の例の解釈としては1と見るのが穏当であろう。従って、離れたテを返読を示すものとする見方を取ると、右の表3では、之字をコレと訓んでいると見られる例として分類されることになる。

これに対し、離れたテを句切りを示すものとする見方によると、この□之の例については、左のように考えられる。

1□之の左下の星点を離れたテ（句切りを示すもの）と見て、之字の下で句切りとなる形で訓読する。この時、之字には訓点が施されていないため、コレと訓んでいるのか不読としているのかは不明である。

2□之の左下の星点を壺のテと見る。つまり之字自体をテと訓読する。

この両者についても、右と同様に2を採らず、1と見るのが穏当であろう。この見方によると、右の表3では、之字をコレと訓んでいるのか不読としているのか明らかでない例として分類されることになる。

「真福寺本」における之字の陳述の例を見てみると、確かに、之字をコレと訓んだ例もあり、また、之字に対して無訓の例もあるから、右に示したように□之の場合に、離れたテを返読を示すものと見て之字をコレと訓む可能性を考えることもできるであろうし、また、離れたテを句切りを示すものと見て之字を不読とする可能性を考えることもできよう。しかし、之字をコレと訓むことについては、筆者が思うに、確かに「真福寺本」において之字をコレと訓んだ例は存するが、わずかに一例であり、この例が例外的なものである感は拭えないように思う。この「真福寺本」において、也字が不読とされ、連体修飾の之字が不読とされていることを考えあわせるとなおさらである。以下に見る而字についても、筆者はこれを不読と見るべきであろうと考えている。このように見ると、離れたテを返読を示すものとする見方を取ることによって、之字をコレと訓むという、ある種、例外的な訓み方が行なわれることになることは、やはり軽視すべきではないのではないだろうか。

この場合、そのように離れたテを返読を示すものと見るのではなく、やはり、筆者の言うように句切りを示すものと見て、之字を不読とする可能性を考えた方が、他の之字や也字の用例を鑑みて、おさまりがよいのではないだろうか。

この□之の例は、「真福寺本」においてはわずか一例しか見られず、この一例をもって断定的な議論を行なうことは危険である。しかし、同じく博士家点とされる岩崎本『日本書紀』巻第二十二推古紀（平安中期末加点）（以下、『推古』と略す）において、「真福寺本」と同じように□之の形で用いられた例が見られ、その時、やはり、之字が不読であり、離れたテを句切りの点と解釈すべきこと、拙稿（二〇〇七）（二〇〇八）に述べたとおりである。これらのことを考えあわせると、この「真福寺本」におけるこの之字の例は、わずかに一例ではあるけれども、離れたテを句切りの点と見る上で、注目すべき用例となり得るものではないかと思う。

之字については、小林芳規氏（一九六二）が、

一、仏家点では、

イ、平安初期には、陳述助字としては不読で、上にそれが指す語句のある際に「コレ」と代名詞の訓を充てる。

ロ、平安中期以降は、一様に「コレ」と訓ずるのが一般である。

二、博士家点では、平安中期以降も（桂庵らの新点の影響を蒙るまでは）不読であつた。

と述べておられ、もしこれをこの『遊仙窟』にも当てはめて見ることができるならば、この之字の加点状況から考えて、「真福寺本」の方が博士家点として古い形を残しており、一方の「醍醐寺本」は、仏家点などの影響を受けたものである可能性が考えられるかもしれない。

六、而字の訓まれ方について

先の表1に示したように、『遊仙窟』において而字が存する箇所は、～テという形に訓まれるものがほとんどで、その他には、～シテカ（「真福寺本」一一オ六、「醍醐寺本」一二五）となっているものと、「而已」という形でナ(ラク)ノミ（「醍醐寺本」四四二）（「真福寺本」は訓合符のみ（三九オ二））と訓まれているものがある。而字をシカウシテと訓んでいると見られる例については、「醍醐寺本」にのみ見られるようである（一二五、四九三）。

而字が不読であるのか否かを見る際には、而字のところで～テという形に訓読される例を見てみることが有用であろう。左に、前掲の表1から、それに関すると見られるものを抜き出し整理して示す。

〈表4〉

〈真福寺本〉

【而】（全三〇例）

◇而字をテと訓んでいると見られる例（全〇例）

なし

◇而字をテと訓まず不読としていると見られる例（全一例）

△△而（テ）　一例

◇而字をテと訓んでいるのか不読としているのか明らかでない例（全二七例）

△△而　七例[4]　▽▽而　九例　△△（□テ）而　一例　無訓　一〇例

〈醍醐寺本〉

【而】（全三三例）

◇而字をテと訓んでいると見られる例（全一例）

▽▽而テ　一例

◇而字を不読としていると見られる例（全七例）

△△而　二例　▽▽而　二例　△□テ△而　二例　▽▽テ而テ　一例

◇而字をテと訓んでいるのか不読としているのか明らかでない例（全二一例）

△△而　一一例　▽▽而　三例　△△而　一例

▽▽テ而　二例　△□テ△而　一例　▽▽□テ而　一例

▽▽□テ而　一例　□テ△△□テ而　一例

右の表4を通覧するに、「真福寺本」においては、一貫して而字の下にテのヨコト点が打たれているのに対し、「醍醐寺本」においては、而字の下だけでなく、而字の上にもテのヨコト点が打たれており、この点が大きな相違点のようである。また、「醍醐寺本」においては、一例ではあるが、而字に仮名点でテと施された例が見られ（用例〔33〕）、そのような例は「真福寺本」には見られない。

この「醍醐寺本」にのみ見られる仮名点のテの施された而字の例は、同様に「醍醐寺本」にのみ見られるシカウシテと訓んでいると見られる而字の例と、而字自体を訓んでいるという点において共通している。これら而字を訓んでいると見られる例が「醍醐寺本」にのみ見られることについては、先に見た之字が「真福寺本」では無訓で、「醍醐寺本」に訓の施された例の見られたことが思い合わされる。これら而字の例についても、之字の場合と同様に、「真福寺本：不読」「醍醐寺本：訓んだ例あり」という傾向が表れているのではないだろうか。

しかし、そのように見るためには、而字の下に施されたテのヨコト点の解釈が問題となる。離れたテを、返読を示すものと見るか、句切りを示すものと見るかという問題である。右に述べたように、「真福寺本」においては、テのヨコト点を全て而字の下に施し、「醍醐寺本」においては、而字の上下両方に施した例が見られるのである。

もし離れたテを返読を示すものと見るならば、△△而の形になった場合、而字の下に施されたテのヨコト点を返読を示すものとは考えにくいであろうから、やはり、このテのヨコト点は、壺のテと解釈するのが穏当であろう。つまり、而字自体をテと訓んでいると見ることになる。対して、△△而の形になった場合には、而字は不読ということになる。

この見方に従うならば、「真福寺本」においては、テのヨコト点は全て而字の下に打たれているから、その場合、全ての而字がそれ自体テと訓まれているということになる。一方、「醍醐寺本」においては、而字の上下にテのヨコト点が打たれた例が見られるので、而字自体を訓む訓み方と不読とする訓み方がともに存することになる。つまり「真福寺本：全て訓む」「醍醐寺本：訓んだ例あり」ということである。

確かに、そのような見方も一つの見方ではある。しかし、そのよ

うに見ると、右に述べたように、その而字の仮名点を見た時に「醍醐寺本」の方にこそ而字を訓んだと見られる例（テ・シカウシテ）が見られることと矛盾してはいないだろうか。また、その而字の傾向が、先に見た之字の傾向（「真福寺本：不読」「醍醐寺本：訓んだ例あり」）と異なったものとなり、一貫性を欠くものとなってしまう点についても問題はないであろうか。特に、テのヲコト点が打たれた例に限って言えば「真福寺本」において全ての而字が訓まれていることになってしまうことは、「真福寺本」における也字や之字の傾向から考えて、あまりに極端な傾向であるように思える。

筆者は、「真福寺本」の而字の下に施されたテのヲコト点は、やはり句切りを示すテのヲコト点と見るべきではないかと思う。筆者の言うように、而字の下に施されたテのヲコト点を句切りを示すものと見れば、このテのヲコト点（離れたテ）は、而字の下で句切りとなることを示すためにそこに施されたものと解釈することができ、必ずしも而字自体をテと訓む必要はなくなる。そのように見れば、「真福寺本」におけるテのヲコト点が打たれた而字についても、これを不読と見ることが可能となり、つまり、而字についても、「真福寺本：不読」「醍醐寺本：訓んだ例あり」という、之字と同様の傾向を見ることができるようになるのである。

而字の～テという形に訓まれる例以外の例（前述）についても、「真福寺本」においては、「而已」の形で訓合符が付された一例を除き、而字自体に訓点が施された例は見られず、而字を不読とする見方に矛盾してはいないようである。「而已」の例についてはノミと訓んでいると見られるが、これは別に見るべきであろう。「醍醐寺本」においては、特に、シカウシテと訓んだと見られる例が存するなど、而字自体を訓む訓み方があったであろうことが窺われる。

思うに、「醍醐寺本」に見られる△△而のような例は、全くの推測ではあるが、もし「醍醐寺本」が、先の之字のところで述べたように、仏家点の影響を受けた可能性があるとすれば、仏家点において漢字左下の星点を返点としていることから考えると、あるいは、離れたテを返点の位置に打った可能性もあるのかもしれない。

七、まとめとして

筆者は、浅学にして訓点資料における助字の訓読がどのように行なわれているのか、その実態を把握できていない。そのため、一資料内における助字の傾向に一貫性を見出し、それによってテのヲコト点を考察することについて、それが有用なことであるのかどうかの不安はある。

しかし、筆者がこれまで調査を行なってきた『白氏』『推古』、そして、毛利博物館所蔵『史記』第九呂后本紀（一〇七三年加点）、東北大学図書館所蔵『史記』第十孝文本紀（一〇七三年加点）、などの資料において、離れたテを句切りの点と解釈すべきと考えられ、また、小稿で取り上げた『遊仙窟』においても、同様に離れたテを句切りの点と見た方が、助字の訓読に関して一貫性をもって解釈することができるとすれば、やはり、全くの無用の考察ではあるまい。離れたテを句切りの点とする見方は、離れたテを返点とする見方とともに、併せて見ていく必要があるのではないだろうか。

〈注〉

1 「・」のこと。

2 之字の前に付されている記号が雁点などの返点ではなく訓合符であるため、返読した形では訓まれないと見てここに分類したが、或いは□之と同様に扱うべきかもしれない。

3 これをここに分類していることについては、後の考察を参照のこと。

4 これをここに分類していることについては、後の考察を参照のこと。以下の、而字の左下にテのヲコト点が打たれている例も同様。

〈参考文献〉

古典保存会（一九二七年）『遊仙窟』

平井秀文（一九三八）「真福寺本遊仙窟攷」『国語と国文学』一五・四

平井秀文（一九五三）「真福寺本遊仙窟・訳文稿」『福岡学芸大学紀要』二

貴重古典籍刊行会（一九五四）『遊仙窟』

小林芳規（一九六二）「陳述の助字「之」の訓読―特に、博士家点と仏家点との訓分け―」『文学論藻』二三・斎藤清衛先生古稀記念特集号

小林芳規（一九七四）「返点の沿革」『訓点語と訓点資料』五四・遠藤嘉基博士古稀記念特輯号

太田次男・小林芳規（一九八二）『神田本白氏文集の研究』勉誠社

築島裕・杉谷正敏・丹治芳男（一九九五）『醍醐寺蔵本遊仙窟総索引』汲古書院

越智裕二（一九九七）「訓点資料における「句切り」「返読」を示す星点をめぐって」修士論文

越智裕二（一九九八）「『神田本白氏文集』における「て」のヲコト点について」『山口国文』二一

笹岡祐子（二〇〇一）「史記第九呂后本紀にみるテのヲコト点の加点の意義について」『山口国文』二五

越智裕二（二〇〇七）「『岩崎本日本書紀巻第二十二推古紀』における「テのヲコト点」について―助字「之」に加点された「テのヲコト点」に着目して―」『東アジア研究』五

越智裕二（二〇〇八）「訓点資料における「句切りの点」分類考」博士論文（　・　）